

長野県埋蔵文化財ニュース

No. 2, 3

1983. 1. 20

(財)長野県埋蔵文化財センター 〒380 長野市長門町1097 ☎0262-34-2848
岡谷調査事務所 〒394 岡谷市郷田2-7260 ☎02662-4-0522

鉄器の保存処理

埋蔵文化財出土遺物保存処理国庫補助事業（更埴市）

内容 森將軍塚古墳関係——轡1、刀子4、鉄鏃19、
鉄斧1、鉄刀2、剣身
6、鎗1、(35点)
五輪堂遺跡関係——鋤頭1、刀子1、鉄斧
1、紡錘車1、不明鉄
器一括

費用 国—— 182,000円 (50%)

県—— 54,000円 (15%) } 合計 365,000円

市—— 129,000円 (35%)

(処理委託費 322,500円、旅費42,500円)

委託先 財団法人元興寺文化財研究所

処理内容 サビ落とし、アクリル樹脂含浸および塗
布、(資料提供 更埴市教育委員会)



左、処理後
右、処理前
(上、鋤頭
下、不明鉄器)

科学的保存処理を必要とする出土文化財の実態調査結果について

文化課

県教育委員会では近年の発掘調査の増加に伴い、出土文化財も増加していることに鑑み、そのうち鉄製品等、保存処理を行わなければ、近い将来腐蝕等により消滅してしまう出土文化財の実態調査を九月に市町村教育委員会へ依頼し、実施しました。その結果、122市町村中、71市町村から回答があり、別表のとおり20市町村で保存処理を必要としている出土文化財がありました。

鉄製品等の出土文化財は、必ず保存処理をしなければ将来にわたる公開、活用要充分耐えないもので、この種の出土文化財は全てリストアップしておく必要があります。しかし、今回の調査については、若干趣旨の徹底を欠いたむきもあり、保存処理を希望している市町村のみから回答を頂いたという結果になったとみうけられます。が、一方では、20市町村で鉄器類818点、鉄器を除く金属器類55点、木器等214点の計1,087点について保存処理を必要としていることがわかりました。鉄器類については、過去、55年に更埴市、56年に長野市で国庫補助事業により奈良の元興寺文化財研究所において、計87点が保存処理されました。このペースで

ゆきますと、今回の調査の結果保存処理が必要であるとされた818点の鉄器類については、凡そ20年かかるという計算になります。

近年、市町村等において博物館、歴史民俗資料館等の展示、公開施設の建設が進んでいます。この中で、鉄製品等の出土文化財の公開、活用のためには早急な保存処理が必要と思われます。今後、保存処理を必要とする出土文化財をどの様に取り扱い、公開、活用を図るかということは、埋蔵文化財の保護思想を普及してゆくうえで、重要な課題の一つと考えられます。

市町村名	鉄器		銅器等		木器他	
	遺物点数	要処理点数	遺物点数	要処理点数	遺物点数	要処理点数
小諸市	58	55	2	0	—	—
北相木村	—	—	—	—	12	12
軽井沢町	5	5	1	1	—	—
望月町	156	154	22	22	—	—
浅科村	6	6	1	1	—	—
上田市	122	122	—	—	—	—
駒ヶ根市	35	35	24	24	—	—
箕輪町	1	1	3	3	48	48
岡谷市	110	0	1	1	—	—
富士見町	8	7	6	0	—	—
原村	21	21	—	—	—	—
飯田市	260	260	3	3	151	151
阿智村	10	10	—	—	—	—
豊丘村	—	—	—	—	1	1
明科町	6	6	—	—	—	—
須坂市	95	95	—	—	—	—
中野市	22	22	—	—	—	—
信州新町	11	11	—	—	—	—
豊野町	8	8	—	—	—	—
信濃町	—	—	—	—	9	2
	934	818	63	55	221	214

保存処理の需要が市町村によって非常にアンバランスであるのは、処理状況の差を示すものでなく、担当者の認識によるところが大きいのではなかろうか。文化課で把握している遺物保存処理事業は昭和55年以降2件を数えるのみである。

現在でも資料館の展示などで脱脂綿に包まれている金属器を見かけることがある。保存という文化財に対する最も基本的な態度に、科学的な裏付けがなくてはより良い結果は望みがたいといえる。科学的保存処理の方法は現在ある程度完成しつつあり、金属器、木器などの処理が各種の機関でかなり効果的に行なわれるようになっている。当センターでも設備の設置、運用を計画しているが、実現すれば県内の需要にもある程度応えることができよう。現在でも、急速にその形を失いつつある出土金属器を思うとき、処理委託費の予算化とともに、施設の早急な実現が求められよう。

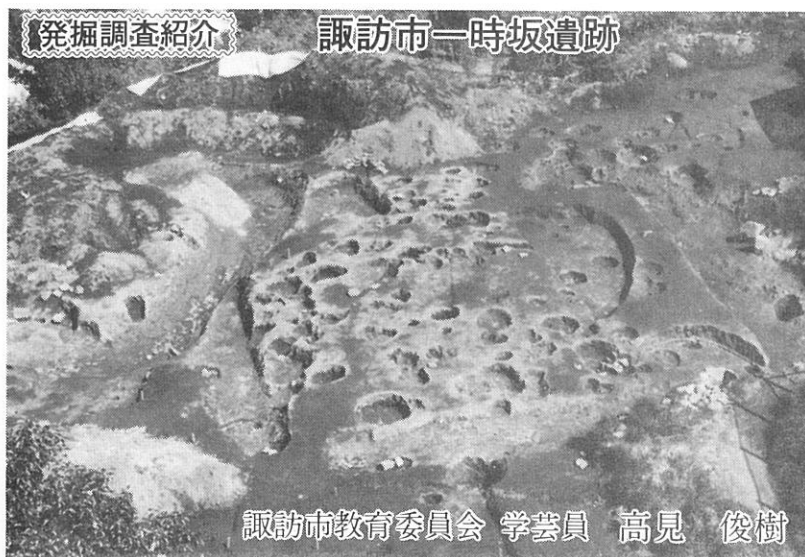
金属器の応急的な保管にあたって注意すべきは、何よりも乾燥状態を保つことである。現場である程度、遺物の保存状態は把握できるだろうからそれに応じた土落とし、サビ取りが必要である。取り上げは必要な記録を取った後、できるだけ早い方がよい。天日、加熱などによる乾燥を充分行なって後、ポリ袋、ケースなどに乾燥剤とともに密封しておき、以後の処理に備えるべきであろう。この場合、木、綿など湿気を帯び易いものをクッションに使うのは避けなければならない。

出土金属器は出土と同時に環境が激変することになり、以後の変化は目で見える以上に急速である。保存のためには専門家による処置がどうしても必要であり、出土から時間を経過すると原形を損ない、処理作業もより困難となり、時間も経費もかかり、かつ不完全なものになりやすい。

保存処理に関してセンターでは現在、相談に応ずる体制にないが、技術的相談、処理事業の委託などは下記の機関に相談されたい。奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター（電話0742-34-3931）。元興寺文化財研究所文化財保存処理センター（電話07437-4-6419）。

発掘調査紹介

諏訪市一時坂遺跡



諏訪市教育委員会 学芸員 高見 俊樹

(一時坂遺跡北半の遺構—前方後方形周溝墓など)

諏訪市一時坂遺跡は、諏訪盆地の東縁を形成する霧ヶ峰山塊末端、標高約810mの小台地に立地する。周辺には階段状のテラスを有する同様な地形が多いが、いずれもフォッサマグナに伴う断層活動により生じたものである。台地の下方は現在は沖積地の平坦面であるが、過去の長い期間は諏訪湖が広がっていたことがわかっていて、これらの台地は各々条件の良い遺跡地となっており、一時坂遺跡に近接して茶臼山・上ノ平・踊場など著名な遺跡が分布している。又、一時坂台地北西側を流れる角間川に沿う一帯にも穴場・唐沢など縄文時代の大遺跡が続いている。

一時坂遺跡は、台地東の市立諏訪中学校の校舎に連続しており、かつては諏訪中学校横遺跡と呼称されていた。今回の調査は新体育館建設に先立つ緊急発掘調査である。台地全体の形状が改変されるため全面を発掘したが、台地先端に発見された古墳については本調査結果などをふまえ盛土によって保存されることになった。対象面積は約2,200㎡、発掘調査は7月1日から

8月20日まで実施された。

この調査で発見された主な遺構は以下の通りである。

- 縄文時代……住居跡5（中期）、土坑約200（前期末～中期初頭）
- 弥生時代……住居跡6（中期～後期）
- 古墳時代……周溝墓3、円墳1、土坑墓1、石棺墓1
- 平安時代……住居跡2

最も注目される遺構は、新発見の古墳と前方後方形周溝墓であろう。台地の先端に丘尾切断でつくられたこの古墳は直径約20mの円墳、もしくは

隅丸の方形墳である。深さ約2mの溝を山側に掘り、中心側には盛土をして、こうして形成された墳丘の山側斜面にのみ葺き石を施している。湖側半分は自然地形の斜面を利用しており葺き石も認められないが、耕作と道路開設で一部が破壊されているため詳細は不明である。葺き石は人頭大程度の川原石および山石が幅約2mにわたって積まれているもので、本格的な葺き石を有する古墳としては、市内では本年再調査された片山古墳に次いで2例目の発見である。

主体部は、耕作による破壊もあって形状の把握が困難であったが、4基のうち1基については掘り込みを検出した。いずれも木棺直葬とみられ、3基はほぼ北向きである。4基からの副葬品は、直刀8・鉄剣2・鉄鏃約100・玉類約200にのぼっている。鉄製遺物の保存状態はかなり良く、木質部の残っているものもある。直刀のうち最大のものは全長110cmである。

山側の周溝底からは、いわゆる墓前祭祀に相当すると考えられる大量の土器が発見された。これらは概ね7つの集中部分にグルーピングされ、うち6グループは周溝底にあり、1グループは周溝外側より中にくろげ落ちたような状況にあった。およそ70個体にのぼる土器類の大部分は土師の高杯で、これに土師器では杯・碗・壺・甕・須恵器では蓋杯・甕・蓋付高杯・甕が加わる。周溝底の6グループのうち東側の3グループは、ほぼ祭祀時に置かれたままの状態ですべて土器が整然と並んで発見された。それぞれのグループでは、基本的には土師の高杯が2列4段に並べられ、高杯の上に杯や碗・甕・蓋杯などがのせられていた。土師器・須恵器ともに精緻に製作されており、自然釉のかかった2



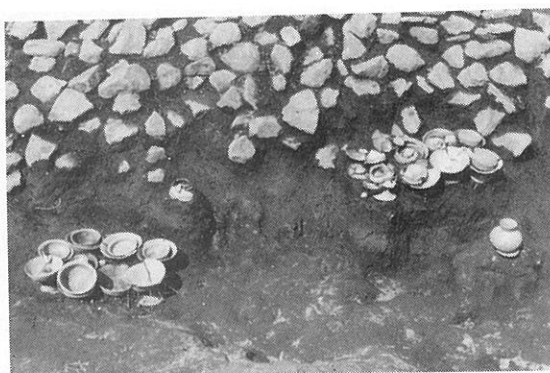
一時坂古墳

個の趣は特に出来が良い。土師器はグループごとに整形や胎土に差異が認められる。

遺物の大半は未整理だが、土師器・須恵器・鉄製品ともに5世紀末から6世紀初頭に属するものと考えられる。一時坂古墳は、この時期の古墳としては諏訪湖東岸では初の発見である。

古墳より山側は、各時代の多くの遺構が重複しており、3基の周溝墓もこの地区に連続してつくられている。最大の1号周溝墓は台地の中央にあり、一辺約20mに及ぶ前方後方形の周溝墓である。これは諏訪地方の周溝墓の中では最大、また前方後方形のものとしては県下初の発見と思われる(注)。長軸はほぼ南北方向で、前方部は溝の末端の幅を太くすることによって北側につくり出されている。溝は比較的深く掘られており、土師器の壺と甕(五領式か)が出土した。

他の2基の周溝墓は方形周溝墓と思われるが後世に破壊をうけており、全体の形状は明らかではない。またこれらに隣接して、小規模な石棺墓と土坑墓が設けられていた。石棺墓には土師器杯と鉄鏝が副葬され、土坑墓の外には古墳周溝底と同様の土器配列が認められた。



古墳周溝底の土器

以上、古墳時代の遺構を中心に略述したが、この狭い台地上に様々な墳墓が連続的につくられていることは注目し値する。その他、縄文・弥生の遺構にも見るべきものが多いが、特に縄文前期末～中期初頭の200基の土坑群や弥生中期の大形住居などが重要であろう。いずれも今後の資料整理を経て性格を明らかにしていきたい。

(注) その後11月に長野市塩崎で前方後方形周溝墓が発見されたようである。尚、他に類例があれば御教示願いたい。

更埴市森將軍塚古墳

更埴市教育委員会 矢島 宏雄

史跡森將軍塚古墳保存整備事業第2年目の前方部全面発掘調査は、関係のみなさまの御協力により多大な成果を上げ終了することが出来ました。本事業は、森將軍塚古墳を全面発掘調査に基づき、築造当時の姿に復原し、さらに便益施設、道路等の周辺環境整備をも合せて行ない広く公開することを目的とします。



今年度の検出遺構

本年度は、前方部全面発掘調査を7月21日から10月31日の72日間行ないました。その結果前方部墳頂部に長さ1.8m×0.7mの竪穴式石室1基、墳丘裾まわりを中心に埴輪円筒棺6基(昨年度の1基含む)、組合式箱形石棺24基(昨年度分を含む)前方部墳頂部に配石遺構1基などを検出しました。墳丘は、頂部を千曲川産の川原石をしきつめ、まわりを古墳周辺産のひん岩の大小礫を空積みしており、また墳丘東側の岩盤を削平して平坦面を作り、西側はやせ尾根に盛土して墳丘を整えていることが明らかになりました。

遺物は、大量の円筒埴輪および朝顔形埴輪、壺形埴輪のほかに家形埴輪と考えられるものも多数出土しましたが、いずれも原位置を保つものではなく、埴輪配列については十分明らかとはなりません。竪穴式石室は、破壊が著しく側壁もほとんど片側しか残っていない状態で管玉の破片が1点出土したのみでした。埴輪円筒棺内からも白玉が数点出土したのみです。石棺の周囲からは5世紀代の土師器が出土しており、ま

たTK73窯期の須恵器大甕が据えられた状態で押しつぶされて出土しました。

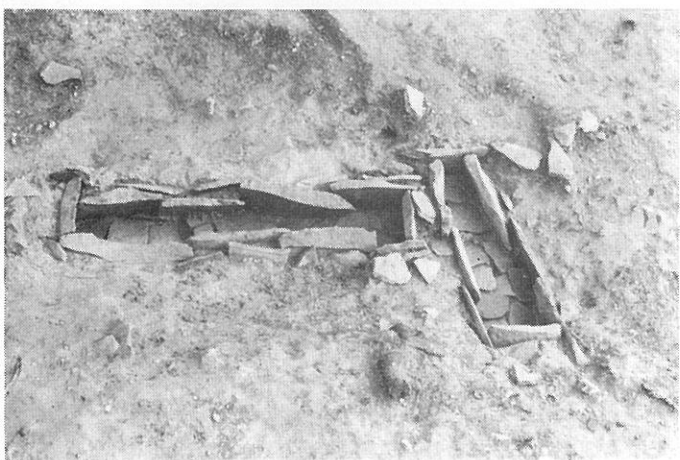
本古墳主体部（後円部石室）と前方部石室との関係については不明確な点が残りますが、裾部をめぐる石棺群は、古墳築造後、墳丘の崩落が始まった後、4世紀末から、くびれ部古墳（3号墳）が築造される6世紀代の間につくられたと判断されますが、規模、副葬品の有無、蓋の有無、裾部と墳頂部など、多様であり、一時に造られたものではないようです。来年度はいよいよ後円部調査を計画しております。石棺群、墳形の解明など来年度の課題も多く、今後ともみなさまの御指導、御協力をお願い申し上げます。



森将軍塚の調査は100m級の前方後円墳の全面発掘という全国でもあまり例のない調査である。また、復原整備という事業も前方後円墳では数例目である。史跡の整備にあたって復原という手段をとる場合、その程度や複合する数時代の遺構をどう扱うかなど問題も多い。しかし、歴史を視覚的に体験できるということは文化財の理解のためにも非常に効果的である。

保存のためには整備、管理が必要であるが、現状を保つためには何の手も加えない方が良い場合もあろう。しかし、発掘調査の行なわれた遺跡について公有化などの保護策をとりえた場合、遺構の保存という点からも、史跡の公開、学術資料の社会への還元という点からも、未整備のまま放置するのは積極的な方法とはいえない。

県内でも、現在、森将軍塚のほか、松本城二ノ丸などで整備計画が進められている。後者の場合、建物配置、柱位置などを地表に表示するもので、森将軍塚の整備とは考え方が異なり、寺院跡、宮跡などの整備で多く採用されている方法である。これには実物の遺構を見ることができないという問題が指摘されているが、遺構の形態、状況などにより種々の整備方法がとられねばならないことを示すといえよう。（T）



上、前方部竪穴式石室
中、箱形石棺
下、埴輪円筒棺

調査速報(2)

岡谷市大久保B遺跡

本遺跡は、年度途中に発見されて調査地域となったものである。成田公園西側の沢奥に立地するが、眼下を天竜川が西流し、東側は諏訪湖や八ヶ岳が一望できる環境にある。標高835m付近の等高線に沿って扇形に広がる約4,700㎡が調査の対象となった。



遺跡遠景（南から）

これまで遺跡全面に、戦中から戦後にかけて造られた段々畑が広がり、遺跡内の標高差は10m以上に及ぶ。このため自然災害の恐れもあり、初めから全面を広げることはせず、幅広のトレンチを多目に設定して、必要に応じて拡張することにした。トレンチは各畑に1～2本ずつ、計28本を主に等高線と平行に設けた。その結果、現在2つの尾根に挟まれて沢状になっているが、原地形はいくつもの小さな尾根と沢とから形成されていることが判明した。基本的層序は、耕土層（Ⅰ）・黒色土層（Ⅱ）・暗褐色土層（Ⅲ）・黒褐色土層（Ⅳ）・漸移層（Ⅴ）・明黄褐色土層（波田ロームⅥ）・赤褐色土層（塩嶺累層の崩れたものⅦ）である。

遺構・遺物は縄文時代と奈良時代とに大別される。

縄文時代の包含層はⅢ・Ⅳ層である。晩期・中期・前期の土器片が出土しているが、分布状況は非常に散漫で、しかも小破片が大半である。むしろ石器、特に打製石斧の出土が目立った。遺構には7基の土壇があり、遺跡のやや南寄りに集中して検出された。Ⅳ層下位からⅤ層上位にかけて発見されたが、現地表面からは1.5mも下の急傾斜地に掘られている。直径0.5m前後の浅い土壇と直径1m以上の深い土壇とがあるが、

いずれも遺物は伴わず、性格等は不明である。ただ短期的には、前期の土壇と考えられよう。以上の様子からみて、この地は縄文時代には居住地としては利用されていなかったようであるが、土器の分布の稀薄さに比較して打製石斧が多く出土したことは、当時の人々の生活・行動を考える上で注目されよう。

奈良時代のものとして2基の墳墓（SH1・SH2）が発見された。両者は遺跡の北寄りに4mほど離れて並んで位置し、竪穴式の小石室を持つ墳墓である。北西から南東への傾斜地のため、北西側半分ほどをⅡ層からⅢ層にかけて掘り込んでいる。石室の主軸方向は北西——南東であるが、両者は弱干のずれを持っている。SH1には3個の大きな天井石があり、石室の外寸は2m×1.4m、内寸は1.6m×0.6mである。遺物はなく、骨粉がごくわずかに検出されたのみである。SH2はやや規模が大きく、外寸は2.6m×2.2m、内寸は1.4m×0.7mである。耕作の影響によるのであろうか、天井石は載っていない。また、石室南東部も石が抜かれたり動かされたりしているらしい。残った床面



SH2石室（南東から）

の石の南ぎわから、人骨片と鏡1面がサンドイッチ状に出土した。鑑定の結果、人骨は火葬されたもので、頭・手・足の破片が混ざっているとのことであった。石室内で火葬された様子はないので、火葬後に埋葬されたものであろう。そして最低限、石室が隠れるくらいの土盛りはなされたのであろうが、耕作時に深く削平されているため、マウンドの痕跡は認められなかった。鏡は奈良時代のもので、外径11.7cm、重さ267gの青銅製の「瑞雲双鸞八花鏡」である。全



瑞雲双鸞八花鏡

国に十数面しか残存しておらず、まして遺跡から出土した例は極めて稀である。

奈良時代になって、規墓は小さいとはいえ古墳時代に模倣した石室を造り、しかも火葬して埋葬するという例の発見は、諏訪地方における該期の墓制等を考える上で貴重な資料となろう。

(調査研究員 和田博秋)

岡谷市西林遺跡

西林遺跡(岡谷市間下区)は塩尻峠より尾根状にのびた山腹の南西斜面に位置しており、(長野県埋蔵文化財ニュースNo.1参照) 標高は870m程になる。調査は4000㎡を対象に10月1日より12月7日まで行い、住居址1棟、土坑10基など検出した。

層位はⅠ表土、Ⅱ黄褐色粘質土層、Ⅱ'暗褐色粘質土層、Ⅲ黒色土層、Ⅳ茶褐色粘質土層、Ⅴ黒褐色土層、Ⅵ黄色粘質土層となっており、遺物はⅢ層より須恵器灰釉陶器片、Ⅳ層から縄文前期土器片、石鏃、打製石斧など、Ⅴ層からは縄文前期土器片、縄文早期土器片(楕円押型文土器)などが出土している。遺構はⅤ層からⅥ層に掘り込まれている。

土坑は長さ1m程の楕円形状を呈するもの3基、径50~80cm程の円形を呈するものが7基である。土坑中には炭化物や土器片を含むものがある。

住居址はほぼ円形で径は5m程である。柱穴は8本検出できたが主柱穴とみられるものは1本だけで、住居の構造については今後の検討を要す。炉は地床炉でほぼ中心線にそい、住居の南寄りに位置している。また主柱穴とみられる柱穴の底部近くより、破損した石皿が裏がえしになって出土したことが注目される。石器は比較的少なく、この他には石鏃2点など出土した



住居址

だけである。

この住居址は出土した土器片より諸磯C期に属するものと思われる。

なお本住居址は調査対象区外で、抜根の際に黒曜石片を表採した地点を中心に拡張して検出したために周辺の調査は十分とはいえず、さらに住居址が検出される可能性もある。隣接地区は来年度調査の予定である。

(調査研究員 小柳義男)

岡谷市中島遺跡B地点(2)

前号に続き、B地点の旧石器時代の概要を紹介する。

層序を訂正・整理すると、遺物包含層はⅥ層・Ⅶ層で、共に背後の山塊の塩嶺累層と火山灰とを材料とした河成層である。Ⅵ層は最上位・上位・中位・下位に区分できるが、上位・下位は南側に、中位は北側に偏在し、上下関係は明確にしきれない。Ⅵ層上位下半と同下位、Ⅶ層は亜角礫を多量に含んでいる。これらは時間差をもちつつも一連の洪水又は泥流・土石流の所産と考えられるが、地質年代ははっきりしない。地形は山麓近くに形成された東南向きの小さな扇状地で、遺跡は扇央に位置する。

明確な遺構は検出されなかったが、遺物集中箇所(ブロック)が2ヶ所発見できた。

ブロック1はⅥ層最上位・上位・下位にかけて検出された。発掘域南端のやや急な斜面から緩斜面にかけて15m×12m程の広がりを持つ。Ⅵ層上位下半に礫密集箇所が在るが、これとかなり重複する。この礫の上面から礫間にかけて径4m程の範囲に、人頭大の一枚岩から取った凝灰岩フレイフ(写真)が30点余り出土した。5000点以上ある遺物のうち、石器はポイント・スクレイパー等20点に満たず、大半はポイント・フレイクやチップである事からみても、ブロック1は製作の場としての性格が強い。

ブロック2はⅥ層中位で検出された。発掘域北端の緩斜面に3m×5m程の広がりを持ち、ブロック1とは12m程離れている。遺物は50点余でポイント5点を含む。Ⅶ層からは少量のフレイクが出土するが性格がつかめない。隣接域の発掘は来年度に予定されている。

(調査研究員 百瀬長秀)



接合資料

県内の調査から

今夏も多くの調査が行なわれ、大きな成果とともに保護体制のありかたに疑問を残すような事件もいくつかありました。センターとしても避けて通れない問題と思われます。

ここに紹介させていただいた遺跡の他にも注目すべき調査がいくつかあります。長野市柳原遺跡では、4C末頃の玉造工房址が見つかり、望月町後沖遺跡でも、これよりやや遡るものが調査されています。これで県内の玉造遺跡は丸子町社軍神遺跡とあわせ3例となりました。供給先などの解明が期待されます。

諏訪市一時坂遺跡で見られた陸橋部が前方部状となる方形周溝墓は長野市篠ノ井遺跡群でも見つかっており、弥生末期ということです。ここでは、鉄製腕輪、鉄剣などを副葬する弥生時代の円形周溝墓、土坑墓なども見つかっており、古墳時代の前方後方形周溝墓も発見されています。弥生時代と古墳時代の墓制の関係、近くに位置する姫塚、川柳將軍塚両古墳との関連など

興味が持たれます。

佐久市では北西久保遺跡の他にもいくつか調査が行なわれており、担当者の御苦勞には頭が下がります。

松本市と上田市では重要遺跡確認緊急調査として、国府推定地の発掘が行なわれました。今後、長期にわたる調査となると思われますので、じっくりとした取り組みが期待されます。

岡谷市榎垣外遺跡では、平安期の掘立柱建物群が見つかり、一帯が岡屋牧推定地であることから、それに関連するものではないかと考えられています。建物は規模の大きなもので、倉庫址とともに2×9間以上の長大なもののあることが注目されます。

諏訪市では片山古墳も調査され、幸い保存が決まりました。諏訪湖盆における6世紀代の古墳として貴重なものです。周囲の湯ノ上遺跡では縄文時代中期末の敷石住居址なども発見されました。また、茅野市阿弥陀堂遺跡では平安時代末頃の集落内から計4面の八稜鏡が発見され、諏訪大社上社などとの関連も考えられています。他にも多くの調査が行なわれましたが、その紹介は次号に譲ります。(T)

報告書紹介 『崩 越』

木曽郡王滝村崩越遺跡は愛知用水の牧尾ダム湖中の遺跡で、増水時には水没する。侵食による消滅を危ぶんで1979年より三年次にわたる調査が、地元木曽在住の研究者を中心とする人々によって行なわれた。本書はその本報告である。

調査では住居址が縄文前期諸磯期2、中期勝坂期3加曾利E期3、平安時代2の計10、他に集石炉、土坑などが見ついている。土器は早期および晩期もあり特に前期、中期の資料は、木曽谷における標式的な資料となろう。

諸磯期の資料は、県内では阿久遺跡の調査以後も富士見町机原遺跡、本誌1号で紹介した上浅野遺跡など新たな資料が見出されつつあり、山梨県、関東西部などでも同様である。これら新資料の増加によって、地域性などもより具体的に摘出しうる可能性が高まったといえよう。また、中期初頭の土器が遺跡内に存在する例が多く、前期後半から中期への展開という問題にも良い資料となっている。

いわゆる関西・東海系の土器は、諸磯期土器のほぼ半数を占めるという。北白川下層Ⅱa、b、c式の系統をひくものが多いが、沈線のみで文様を構成するも

のが数多くみられること、浅鉢が顕著なこと、深鉢の底部突出するものがあることなど、関西地方における北白川下層式土器のありかたと若干様相を異にしている。報文中では北白川下層系の土器も在地で製作されたものではないかとしているが、県内の他遺跡ではこの種の土器は明らかに搬入土器と考えられている。この判断のちがいは量の多寡によっているものと考えられるが、生産地に近い地域により多くの土器が搬入されたと考えることもできないわけではない。

石器なども西日本的なものが主体を為し、この時期についていえば、諸磯系なるものの方が外来系であるといえないこともない。我々は日常、北白川下層系の土器が遺跡において客体的に存在する場合しか見ていない。そのことに影響されて、ともすれば文化の流れを西から東へという一方通行的なものとして理解する傾向があったように思われる。県内においては異質なありかたを示す崩越遺跡が明らかにされたことにより、新たな方法論も生み出されて行くものと思われる。

本文中、土器について市村勝己氏の御教示を得た。

(T)

『崩越(くずしご)』 王滝村発掘調査報告書2

木曽郡王滝村教育委員会 昭和57年3月31日発行
(A4判 本文102頁 図版40頁)

埋文施設紹介(1)



原村埋蔵文化財収蔵庫

原村教育委員会

原村では、長野県中央道埋蔵文化財発掘調査の一環として昭和50年度から53年度にわたって、大石・ヲシキ・居沢尾根・中阿久・阿久・柏木南の6遺跡の調査が実施されたが、中でも阿久・大石・居沢尾根遺跡は八ヶ岳山麓でも屈指の大遺跡であったこともあり、発見された石器と土器は極めて膨大なものであった。これらの資料も整理作業が終了する昭和57年3月には、県教育委員会から移管されることもきまっており、また、村教育委員会においても道路拡張工事をはじめ、圃場整備事業などの諸開発に伴う発掘調査で、出土した数多い資料の保管場所も思うに任せない状態であり、これらの資料を一堂に展示および収蔵できる施設の必要性が生じていた。そこで、とりあえず昭和56年度に村単事業として原村埋蔵文化財収蔵庫の建設を、阿久遺跡整備長期計画の一環として、実施した。経過の概要は次のとおりである。

阿久遺跡の発掘調査は昭和50年度から53年度まで実施されているが、52年までの調査で、縄文時代前期の数多い住居址をはじめ環状集石群・方形柱列など貴重な遺構、学術的な新発見があいつぎ、永久全面保存の必要性にせまられた。52年10月30日に地元原村中央公民館に300人の出席を得て開催された県考古学会の臨時総会で、阿久遺跡の全面保存要求が決議された。また、53年2月11日には諏訪市民センターにおいて、600人が参加する中で「阿久遺跡を守る県民集会」が開かれた。

原村では、「阿久遺跡対策委員会」を発足し協議を進める中で、阿久遺跡の全面保存を決議した。

54年7月2日阿久遺跡55,940.⁹⁷㎡が国史跡に指定された。そのうちの40,233.⁴³㎡は54年度から56年度にわたって公有化を実施してきた。

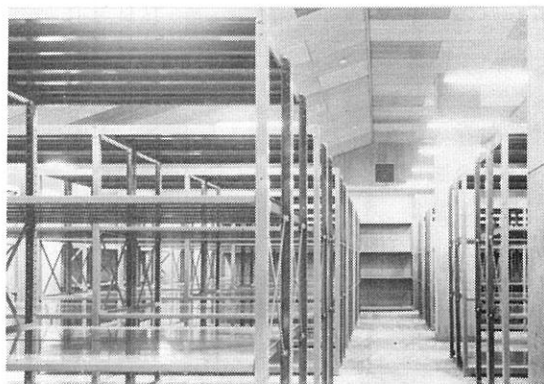
56年3月に発足した「阿久遺跡整備委員会」において、史跡整備をはじめ出土資料の活用を検討し、第1

期事業として収蔵庫建設計画を進めた。収蔵庫・史跡・博物館が一体となったいわゆる「遺跡博物館」構想である。さいわい地主さんに理解ある協力をいただき、建設用地として遺跡の北東に隣接する水田3,123㎡の公有化ができた。

建設は、56年9月の定例議会で決定し、11月に着工、57年3月に竣工というように短期間で完成をみた。これについては、文化庁・県教育委員会・県中央道遺跡調査団・村議会・阿久遺跡整備委員会・原村埋蔵文化財収蔵庫建築委員会をはじめ関係者諸氏の協力によるものである。

収蔵庫の外観は当地方の土蔵を基調とした鉄筋コンクリート平屋建てである。収蔵以外の機能はほとんどなく、仮称「阿久考古博物館」の収蔵庫部と考えることが妥当である。内部は31.⁷⁴⁷⁵㎡の前室2室と287.⁶⁴㎡の収蔵室に区切られているが、前室の1号室は収蔵する資料の簡単な整理室に、2号室は発掘機材の収納室にあて、収蔵室は写真でみるようにスチール製の棚を作り付けた構造になっている。

収蔵施設であるため、現状では収蔵資料は殆ど活用できない。1日も早く博物館建設に着手できるよう努



力しているが、学術的に資料調査を必要とされる方には、事前に原村教育委員会に日時等の打合せをお願いする。場合により当方で日時を指定させていただくこともあるが、あらかじめ御了承願いたい。

なお、原村歴史民俗資料館（八ヶ岳美術館）に、阿久・大石・居沢・尾根・前尾根遺跡出土資料の一部が展示してあるので活用願えば幸いである。（平出一治）

所在地	長野県諏訪郡原村9297-1
敷地面積	3,123㎡
建物面積	鉄筋コンクリート平屋建 376. ²¹⁵ ㎡（延床面積351. ¹³⁵ ㎡）

市町村だより(1)

塩 尻 市

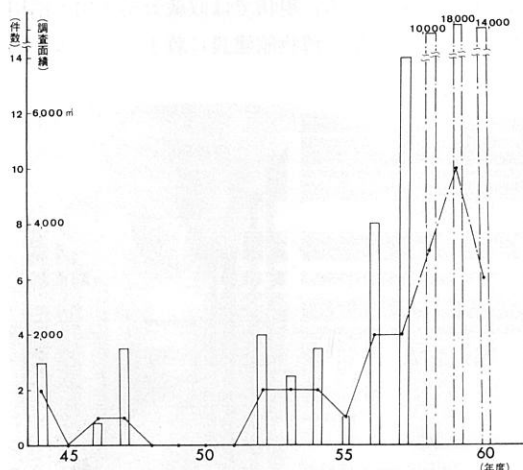
塩尻市における埋蔵文化財保護行政の現状と問題点

塩尻市教育委員会 小林 康男

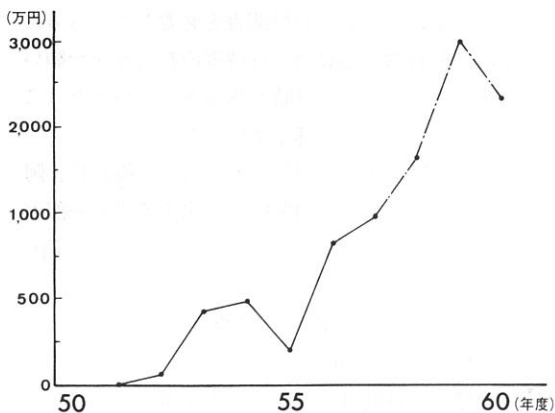
(1) 開発と発掘調査

塩尻市は、1町5ヶ村が合併した173km²の市域を有し、この中に現在知られているだけで223ヶ所の遺跡が存在する。これらの遺跡の大半は、田川流域と筑摩山地の山麓に分布している。

最近まで農業構造改善、圃場整備、道路建設などの土地開発が他地域に比較して低調であったが、ここ数年、これらの開発事業が遺跡稠密地帯である田川流域、筑摩山地山麓を中心として顕著となり、これに伴ない埋蔵文化財への影響も年々増加する傾向にある。今、過去13年間の発掘調査状況と、今後3年間の発掘調査計画の状況を見ると、当市においては昭和56年度を境に従来までの状況が一変していることがわかる(注)。



発掘調査件数・面積の推移 (折線：件数，棒：面積)



発掘調査費用の推移

すなわち、昭和44年から55年度までは、発掘件数は数少なく、調査面積も狭小で、予算額もまた少額であったが、56年度からは調査件数、面積、予算額ともに急増している。特に今後3年間に予想される状況は、まさに埋蔵文化財保護の危機的状態といえる。

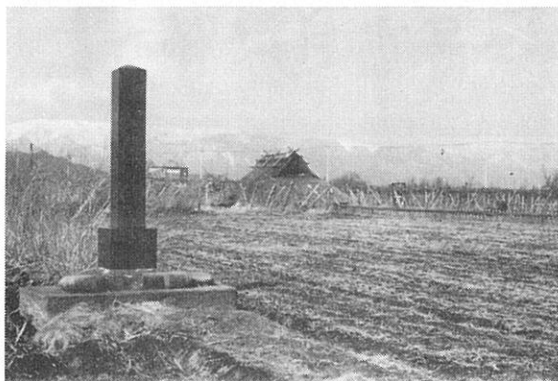
今までの発掘調査の原因は、圃場整備、構造改善、学校建築が大半を占め、他に平出遺跡、樋沢遺跡での学術調査がある。ところが、今後の調査の原因をみると、圃場整備、構造改善は従来どおり主たる要因となっているが、この他に道路建設によるものが急増することに特色がある。こうした、ここ数年間での大きな状況の変化の中で、これに対応する調査組織の面をみると、市教育委員会内に専門職員が一人配置されているのみで、地元研究者、大学生の応援を受けて、かろうじて調査が実施されているといった状態であり、今後の急増する調査に対応するには、今までどおりの体制では既に限界にきているといえよう。

また、調査の予算は、遺跡の立地、遺物の散布状況等によって計上されており、発掘調査の結果は、調査前の予測と一致しないことが多い。当市においては、今まで本調査前に試掘を含めた予備調査を行っていないが、本調査がより一層成果があがるためにも、事前調査に基づいた予算措置が是非とも必要である。

一方、塩尻市では、まだ詳細分布調査が実施されておらず、未確認の遺跡が多々あると考えられ、県下で人口増加率が最も著しい地区といわれる状況の中で、遺跡が闇から闇に葬られていく傾向がないとはいえない。一刻も早い対処が必要であるが、埋蔵文化財の保護には地域住民の埋蔵文化財への意識を高揚させることが何よりも重要なことといえる。このため、博物館が中心となり、調査結果を出張展示会、調査略報の配布などの方法によって地域へ還元し、埋蔵文化財への住民の理解を深め、保護意識を高めるように努めている。

(2) 平出遺跡の保存と活用

平出遺跡は、昭和22年から27年にかけて大規模な発掘調査が行われ、縄文時代から平安時代にわたる集落が東西1km、南北300～400mの範囲にわたって展開していることが判明した。この調査結果に基づき、昭和27年3月に国の史跡に指定された。その後、この指



平出遺跡

定地が市街地に隣接していることもあり、宅地化の傾向が出てきた。このため、文化庁、県教委の指導のもとに昭和50年、51年の両年にわたり、史跡の保存と活用面における指針を盛り込んだ保存管理計画の策定を行った。この中で、(1)遺跡内未調査地区の遺構確認調査、(2)指定地内の公有化、(3)史跡の活用方法について述べられており、現在この指針にもとづいて事業が進められている。すなわち、(1)については、昭和54年～56年度にかけて遺構確認調査が実施され、また、(2)についても昭和56年度から3ヶ年

計画で土地の公有化を進めているところである。(3)の活用については、公有化された地域を中心として、復原家屋の建設、遺構の表面表示、休憩所の設置などの環境整備を昭和58年度から実施予定である。今年度はこのための発掘調査を行ない、更に環境整備委員会を発足させて基本計画を造ることになっている。

平出遺跡は、史跡に指定された約15 haの他に、神奈備山とされる比叡山、平出の泉、長田など遺跡に関連する地域が広範囲にわたって展開しており、これらを相互に連携をもたせ、総合的に整備することによって、この地域における古代史をより一層深く理解することができるとすることができよう。

平出遺跡が、環境整備された後、古代史の学習の場として多くの人々に利用されることを願うものである。

(注) この他、市内における発掘には高校のクラブが実施しているものがあるが、予算、調査面積等不明な点が多いため省略してある。

資料室から

センター資料室で保存、管理する調査資料は、旧中央道遺跡調査団から引き継いだ原図類、写真ネガ、スライド類および県内、各都道府県発行の調査報告書類、雑誌などです。

これらは普及、広開の貴重な資料であるとともに永久に保存しなければならない記録でもあります。公開と保存という異った性格を持つわけですが、内部で利用するのみでなく、広く一般の利用ができるようにすることも必要です。また、今後は、増大する調査情報の県内におけるセンターとしての役割も求められるでしょう。

現在、これら資料の整理を進めていますが、図書類については、県外分をほぼ終了して、目録刊行の準備に取りかかっています。これらは各都道府県教委の発行になる報告書類がほとんどで約3000冊になります。県内分目録は、県史との関係もあり来年度となりそうです。図書以外の資料もほぼ整理済です

が、これらは保存方法の目途がつくまで公開や利用は難しい状態です。

図書については、利用を促進する前提として、今年度内には蔵書目録(1)を刊行し、検索カードの整備などを進めて行きたいと考えます。同時に、相談、普及、複写サービスなどに伴う規定も検討中です。

関連図書および定期刊行物の購入、施設の整備などかなりの費用を必要とし、一気に完備するというわけにはいきませんが、有効に活用される資料室となるよう努めます。図書収集については、関係教育委員会、学会、研究者の方々によるところが大きかったわけですが今後も引き続いて寄贈などで御協力をお願いいたします。

なお、図書資料は現在でも暫定的ではありますが公開しております。利用を希望される方は御問合せください。(TEL262—34—2848)

動向

今年の稲の作況指数は、長野県が全国でも最も不良でした。天候不順な夏でしたが、今夏は発掘関係記事が新聞紙上に登場することが特に多かったように思われます。その多くは緊急調査ですが、史跡環境整備や重要遺跡の確認調査などもいくつか行なわれました。また、下諏訪町星ヶ塔、辰野町丸山など公共事業による遺跡破壊が行政側の不十分な対応によって引き起こされ大きな問題となりました。これらの問題に対しては県考古学会の積極的な取り組みがあり、文化課、町教委、開発側との間で調整が行なわれました。これが教訓とされ、保護体制の充実への努力がなければ再発しうる問題でしょう。保護思想の普及の必要をあらためて考えさせられます。

その点で、最も具体的に遺跡の理解をすすめられるのが史跡の整備、公開です。長野県は、全国的にも早くから遺跡の公園化などが行なわれてきましたが、近年、調査の急激な増加に対応するのに精いっぱい、保存、活用に至るまで十分な手が及ばなくなりつつあります。このような状況のなかでも、松本城二ノ丸、弘法山古墳、森將軍塚古墳などの整備が進んでいることは今後にひとつの指針を与えるものとして期待されます。いずれも活用する側の地域住民の熱意があつてのことです。公共事業に伴う問題の多くは、住民の文化財保護意識のありかたに影響されているのではないのでしょうか。

異動 (9月以降)

転出 県教委文化課長補佐 会津 衛 (水産試験場へ)
同 文化財係長 桜井清志 (南信発電管理事務所へ)
センター調査第二部長 樋口昇一 (県史刊行会へ)
転入 県教委文化課長補佐 藤沢三吉 (北安曇地方事務所から)
文化財係長 鈴木 昭 (薬務課から)

長野県史考古資料編「主要遺跡」二冊 の内〈北・東信〉一冊いよいよ発刊さる。

上記の本が、「地名表・文献目録」1巻(品切、増刷予定)に引続き1月下旬発刊されます。北・東信地区の先土器時代から歴史時代に及ぶ主要な未発表資料も含め157遺跡を収録してあります。約850頁という大冊です。希望者は「長野市南長野県庁東庁舎内長野県史刊行会」宛申込んで下さい。

奈良国立文化財研究所での研修者(57年度)

集落遺跡調査課程	木村隆一 (大町市教委)
一般課程	小柳義男 (センター)
埋蔵文化財基礎課程	渋沢二郎 (豊野町教委)
遺跡測量課程	井口慶久 (センター)
環境考古課程	百瀬長秀 ()
保存科学課程	佐藤信之 (更埴市教委)

今年度の受講希望は6市町村のべ13名でしたが、修了者は現在まで以上の6名です。年々希望者が増えていますが、目的に沿った研修を選択し有効な利用が望まれます。

埋文センター日誌

(9月～12月)

9月	6日	大久保B遺跡発掘作業開始
	16日	千葉県文化財センター奥田正彦氏視察
	21日	新規採用作業員岡谷保健所にて健康診断
10月	1日	西林遺跡発掘開始
		東北歴史史料館岡村道雄氏 中島B遺跡の旧石器指導
	7日	日本道路公団発掘現場視察
	15日	信州大学助教授酒井潤一氏中島B遺跡の地質指導
	19日	百瀬長秀調査研究員環境考古課程の研修出張で奈文研へ 11月6日まで
	25日	日本道路公団発掘現場視察
11月	2日	大久保B遺跡にて、墳墓より火葬骨片と共に青銅製「瑞雲双鸞八花鏡」の出土—新聞発表
	11日	信州大学助教授酒井潤一氏学生3名と共に岡谷地区地質調査と指導 明治大学教授小林三郎氏、大久保B遺跡の火葬墳墓指導
	15日	奈良文化財研究所松沢亜生氏中島B遺跡の旧石器指導
	30日	山梨県考古博物館及び埋文センターへ研修
12月	8日	西林遺跡・中島B遺跡の本年度分発掘調査終了(11日より室内整理作業に入る)
	13日	東京大学地震研究所教授松田時彦氏、神奈川県立博物館松島義章氏等大久保B遺跡の断層調査と指導

(編集 調査第2部)